

7羽の幼鳥を連れたコハクチョウの渡来

村瀬正夫

024-0012 北上市常磐台 2-2-17

北上市には相去町の新堤・大堤の池と北上川珊瑚橋付近との3箇所の白鳥越冬場所があり、毎年600羽を越える白鳥が越冬する。それらはおもにオオハクチョウ、コハクチョウ、アメリカコハクチョウとアメリカコハクチョウのコハクチョウとの亜種間交雑個体とで、とくに1996年以降はその亜種間交雑個体の数は年間30羽以上となっており、日本では他所に例を見ない数の多さで知られている。しかし、ここ10年程の間にオオハクチョウの数の上での比率が高まり、それ以上の白鳥達は次第に圧迫されて数を減らしつつあるというのが実態のようだ。このような背景の中で、今回は同行される幼鳥の珍しい例を紹介する。

1985年、ロシアのコンドラチェフ氏の調査報告では、約100巣での1腹のコハクチョウの卵数は6個というのがわずかに1%、5個が30%程、4個が38%程とほとんどが5個以下、それが孵化直後のひなの数となると、6羽のケースはなく、5羽が14%程、4羽が40%程、3羽は23%程となっており、他の文献でも白鳥の1腹の卵の数はオオハクチョウでは、稀に8個、コハクチョウでは6個までと記されていた。

以上のような背景の中、1999年11月4日に1993年生まれの「クロチャン」の孫の「ヤン」がつかいのコハクチョウの「ソーリー」(イエローネブ)と7羽の幼鳥とを連れて新堤に飛来した。当然考えられることは、この7羽の幼鳥の全部が全部「ヤン」と「ソーリー」の子供ではないかということである。同様なケースは1995年の「クロチャン」家族の渡来時に経験があり、「クロチャン」と「カアサン」とのつかいが6羽の幼鳥を同伴した。しかし実際には「クロチャン」の子供は5羽で、1羽は親にはぐれたアメリカコハクチョウの幼鳥が「クロチャン」家族についてきてしまったものと判明した。

その主な根拠は次の通りである。

(1) 6羽の幼鳥のうち、1羽だけが他の5羽と比べ嘴峰パターンと体形とがやや異なると思われた。その1羽はアメリカコハクチョウとコハクチョウとの交雑ではなくて、純系のアメリカコハクチョウの幼鳥の雌らしいと見られた。

(2) 給餌の時に観察される現象で、両親はどの幼鳥に対してもわけはだてなく見え

るが、幼鳥同士では6羽の幼鳥のうち5羽の幼鳥は残るアメコ様の幼鳥を多少邪魔にするような素振りや、それが近づいてくるのを追う仕種がしばしば見られた。

(3) 新堤のコハクはオオハクの妨害で給餌の時に給餌場に近寄れず給餌が受けられず、近隣の田畑で採餌できる季節には早朝から餌取りにでかける。アメコ様幼鳥は時々そのコハクについて餌取りに出かけ、しばらくしてひとりで堤に戻ってくるなどの他の5羽とは違うひとり行動が時折観察された。

(4) このアメコ様幼鳥は移動などのほとんどの日常行動を「クロチャン」家族と一緒にが行うが、給餌の時などにはひとり行動が多く、とくに北上川珊瑚橋下流の定住域の給餌では最も賢い場所でひとり餌を受け取るのが常であった。

以上のようにかかり早い時期から、6羽のうちの1羽は親にはぐれた同行幼鳥であることが判明していたので、「クロチャン」家族の幼鳥が5羽であることに不思議はなく、このことは従来のコハクチョウの幼鳥数に関する通説との齟齬はなかった。

ところが今回のケースでは、7羽のうちどの個体が親なしでたまたま同行してきたのかの識別に役立つような観察結果はなにひとつ発見できず、むしろ7羽の幼鳥のすべてが「ヤン」と「ソーリー」つがいの子供であると見られる行動観察ばかりであった。

雄親の「ヤン」は「クロチャン」の孫、すなわち第二代交配種ではあるが、その黄色斑はそれ程大きくはなく、遺伝形質として〔(アメコ×コハク)×コハク〕となっており、コハクの形質が勝っている筈であるが、そのコハクが一方はダーキー、もう一方はベニフエースといずれも嘴峰では黒の多い部類に属するためか、一見アメリカコハクチョウに近い嘴峰パターンを持っている。一方、雌親の「ソーリー」はコハクチョウの分類上のイエローネブ系に属しており、この「ヤン」と「ソーリー」とのつがいの子、すなわち第三代交配種の遺伝形質は〔{(アメコ×コハク)×コハク}×コハク〕となっており、しかも最後のコハクの嘴峰の黄色斑はもっと黄色の領域の多い部類に属しており、この子供らの嘴峰パターンはこれまでの経験上からも極めて複雑になっていることが容易に推定された。7羽の幼鳥は、黄色斑の小さい順に「モラン」、「アズミ」、「カビン」、「チャオ」、「コタ」、「ナギ」および「バン」と命名されたが、黄色斑の小さい「モラン」と「アズミ」とどちらかと言えば父親の「ヤン」に似た嘴峰パターンを持ち、黄色斑の大きい「バン」と「ナギ」とは母親似で、残る「カビン」、「チャオ」と「コタ」とはそれらの中間型の嘴峰パターンを示しているので、観察者によっては「モラン」と「アズミ」はアメコに、「バン」と「ナギ」はコハクと見られ、「カビン」、「チャオ」と「コタ」の3羽は見る人によって様々に言われることが考えられる黄色斑サイズになると思われる。しかしこれら7羽の黄色斑サイズはすべて「ヤン」と「ソーリー」の

その中間に入るので、嘴峰パターンからでは連れ子の説の根拠は全く見当たらない。

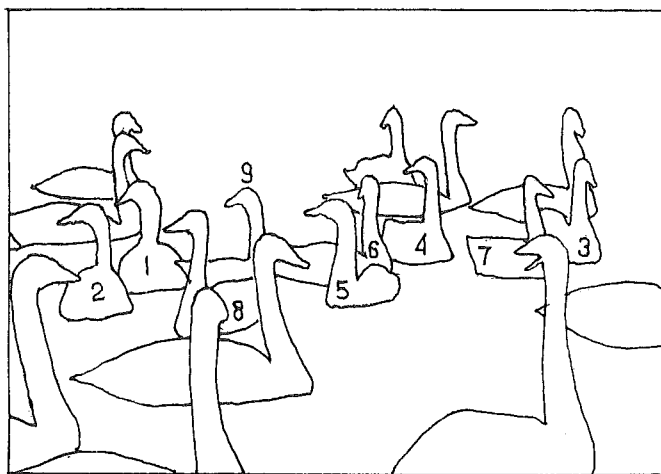
一方、日常行動の面から連れ子を示唆するようなやや異常な動きを示す個体の発見を考えてみた。「ヤン」の家族は飛来後間もなく、そのねぐらの場所を「クロチャン」一族のねぐらである新堤と大堤の双方ではない別の場所に移し、朝の給餌時間にあわせて給餌場に飛来し、給餌が終わると程なく近郊の田圃などの採餌場へ移動するという日程を守っており、十分は観察時間が持てないという不利もあったが、それでも1999年11月4日の飛来から2000年4月3日の飛去の日までの152日間という長丁場の間中まったくと言って良い程一糸乱れず、両親と子供7羽の合計9羽という多人数で、しかもその家族だけでまとまって行動していた。それでも給餌場ではすべてと一緒に餌はもらえないので、両親の夫々に3羽と4羽、或いは2羽と5羽との分かれて給餌人に近づくのが普通でしたが、食べ終わるとすぐにまた集まり、まとまって動くのが認められて、すべてが同じ親の子と言わざるを得ない状況であった。勿論、そんな日常行動の中にも1羽、1羽の夫々の個性は認められ、その個性にしたがって何時も給餌者の右からくるもの、遠くから首を伸ばして餌を催促しているものと色々ばらばらですが、すこしすると何時の間にか又きっちり7羽はまとまっており、どれ1羽として特別の行動をしているものは見当たらなかった。

人間にも双子、三つ子のほかに稀に五つ子或いはそれ以上というケースもあるので、コハクチョウの世界でも稀に七つ子があっても不思議はないのかも知れない。

幼鳥の数に関連して、「クロチャン」の一族にかかわる幼鳥の数の妙な傾向について紹介しておくこととする。「クロチャン」一族の毎年の幼鳥の数は、その年のオオハクチョウ、コハクチョウといった他の白鳥の幼鳥の数が多かった年には一族の幼鳥の数は少なく、他の白鳥の幼鳥の数が少なかった年には逆に一族の幼鳥の数は多いという傾向にあり、今年はその多い年にあたる。しかし多い年、少ない年は一年毎に繰り返すのがここ数年の傾向となっている。今シーズンの一族の幼鳥は「クロチャン」と「カアサン」とのつがいの子は4羽、「クロチャン」の1990年の子供の「ピンキー」と「マユ」とのつがいの子が1羽、「クロチャン」の1991年の子供で今シーズンにコハクチョウのエスタと再婚した「キキ」が2羽、今回の話題の「ヤン」と「ソーリー」とのつがいの子が7羽、そして「クロチャン」の子供の1991年生まれの子の「ズロ」がコハクチョウの「マーラ」とつがいになって出来た子が2羽と合計で16羽となっており、「クロチャン」が北上に飛来し始めてから15シーズンでの幼鳥の最大数を数えた。

アメリカコハクチョウの「クロチャン」とコハクチョウの「カアサン」とが北上市に現れてから15シーズンになる今年で、この2羽に加えて子供、すなわち第一代交配種が38羽、孫すなわち第二代交配種が32羽、曾孫すなわち第三代交配種が10羽、

それに嫁と入婿との9羽で、一族総勢が91羽となっており、毎年ほとんどその半数は北上に再来しているというのが現況である。以上で報告をおわるが、最後に話題の9羽家族の映像とその解説図を示す。



【解説図】

(親鳥)

1.「ヤン」

2.「ソーソー」

(幼鳥)

3.「モラン」

4.「アズミ」

5.「カビン」

6.「チヤオ」

7.「コタ」

8.「ナギ」

9.「バン」

図1. 「ヤン」、「ソーソー」と7羽の幼鳥。